

# 森林に関わるアクターから見た 森林減少の意味



2008年6月22日

松本 悟

(特定非営利活動法人メコン・ウォッチ)

## 「何を話すか」という選択 ～2つのこだわり～

(1) 「ミクロ」と「マクロ」を意識してつなげて考える

ミクロな視点: 一つの事例に終わってしまい一般化がしにくい  
マクロな視点: 現場の多様性が捨象され「どれにも当てはまらない」選択になりうる

(2) 「どうだったのか」に着目する

どうあるべきか論: 問題 現状の分析 解決策  
どうだったのか論: 問題 過去の検証 解決策

## ナモン村

- ラオス中部サイソンブン特別区
- 56世帯370人(00年)
- 低地ラオ族(高地ラオ、中高地ラオ)
- 1960年代まで「ナーサン八村」
- 69年に内戦で山へ避難
- 74年帰村ー村はナムグムダムで水没



## ナムグムダム



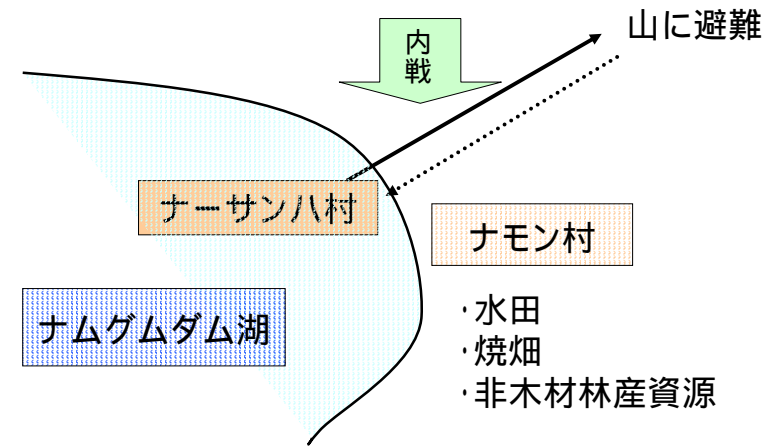
- 日本の政府開発援助(ODA)の草分け
- 日本が51億9000万円融資
- 150メガワット、890ギガワット時
- 350平方キロ(琵琶湖の半分以上)水没
- 日本企業が深く関与

## ナモン村ー帰村後の生活再建

- ダム湖の縁で水田耕作を再開
- ローテーション式焼畑農業
- 非木材林産資源 (non-timber forest products) の活用
- コミュニティ・フォレスト - 自然村や行政村が共同管理して使う入会林

5

## 内戦から生活再建へ



6

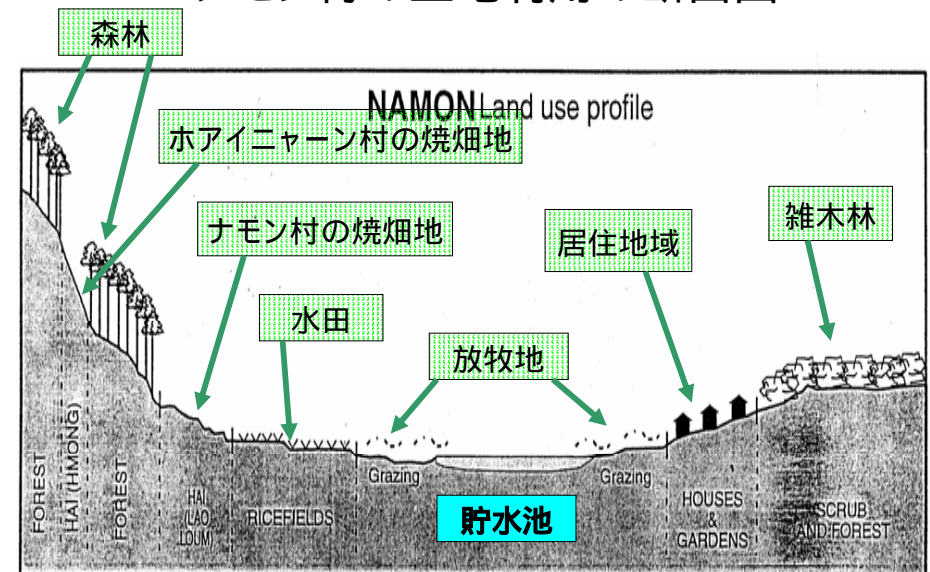


## ホアイニャーンへの入植 (ホアイ = 川)

- 1982年に山岳のモン族数世帯が入植
- 北東部シエンクアン県 ファット山 ここへ
- 右派 & 米軍の爆撃
- 山岳民族政策 (治安、福祉、焼畑廃止)
- 80年代後半には60世帯に増加
- 水田確保困難、米不足、丘陵地の焼畑
- 渓流水量減少 水田水涸れ、林産物減少

7

## ナモン村の土地利用の断面図

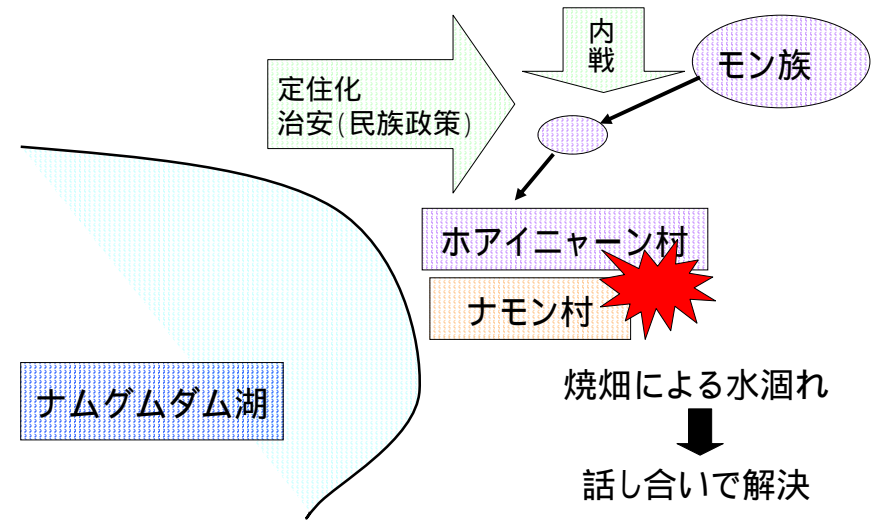


## 困難をどう乗り切ったか

- 良識に任せた森林利用 共同管理へ
- 両村の長老が合意し規則制定
- 農地の拡大には村委員会の許可が必要
- 森林利用許可証の導入
- 隣組による山火事・過剰伐採の共同責任
- 他村との村境を明確化し郡が承認 両村の村境は定めず

9

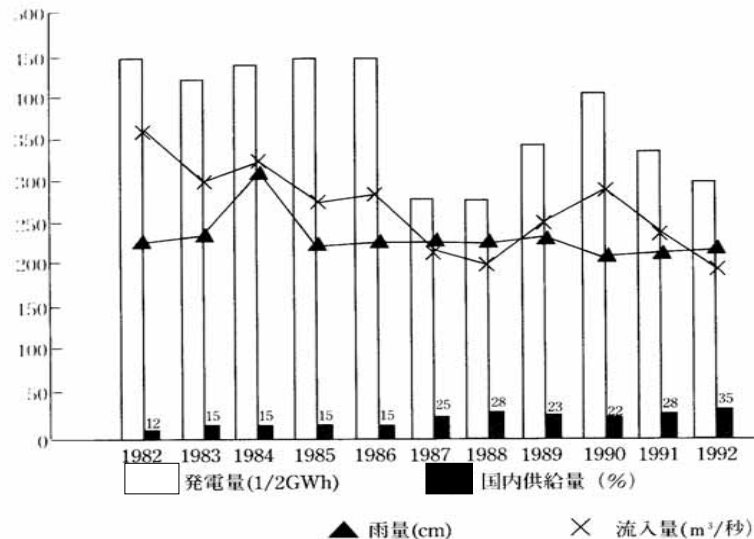
## 対立から和解へ



10

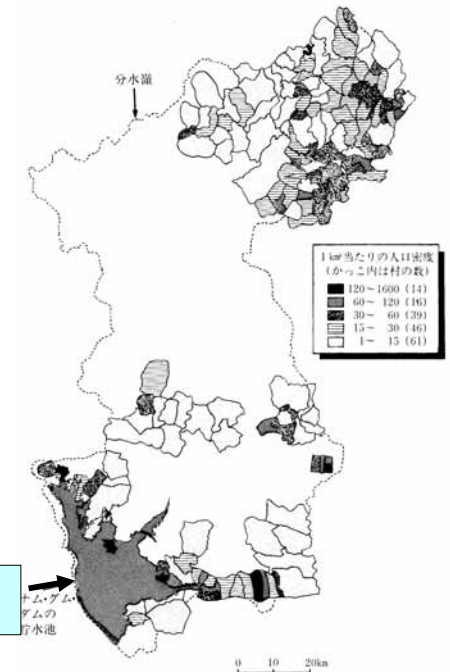
## ダム湖の水位低下と放牧地

80年代半ばダム湖水位低下 農地&放牧地



## 原因は集水域？

- ナムグムダムの集水域は8,460km<sup>2</sup>(ラオス全土の3.6%)
- 約200村、7万5,000人が居住
- 集水域内の営みでダムの水位低下
- ダムには森林が必要



ダム貯水池

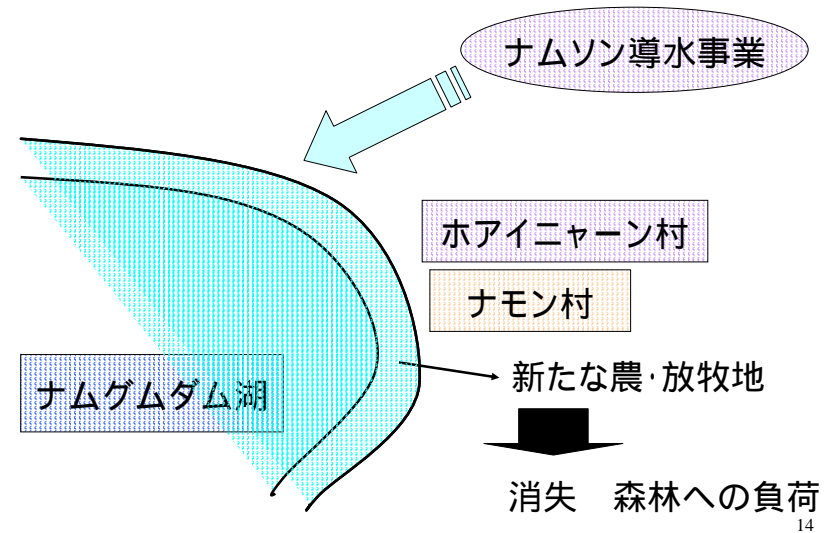


## ナムソン導水事業(堰)

- ナムグムダムの水不足解消 ナムソン川をせき止め導水
- アジア開発銀行(日本が最大出資)の融資、ハザマが建設
- ナムグムダム湖畔の農牧地消失 補償なし



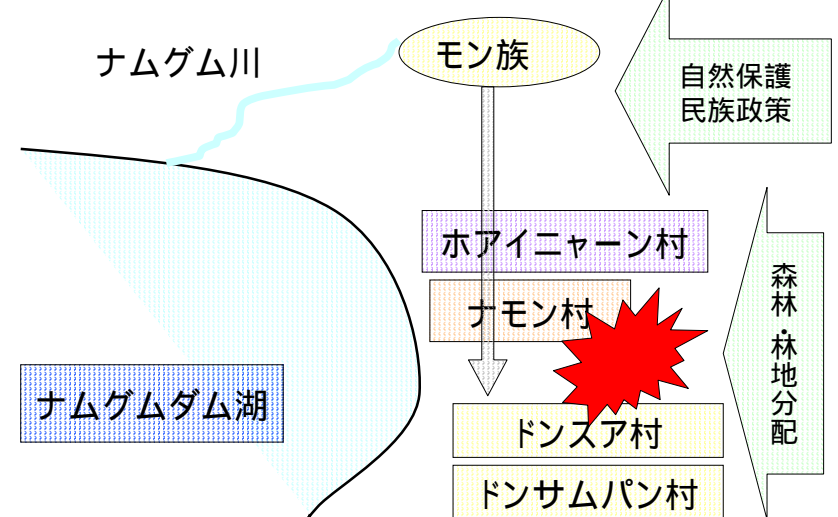
## ダムという解決方法と「副作用」

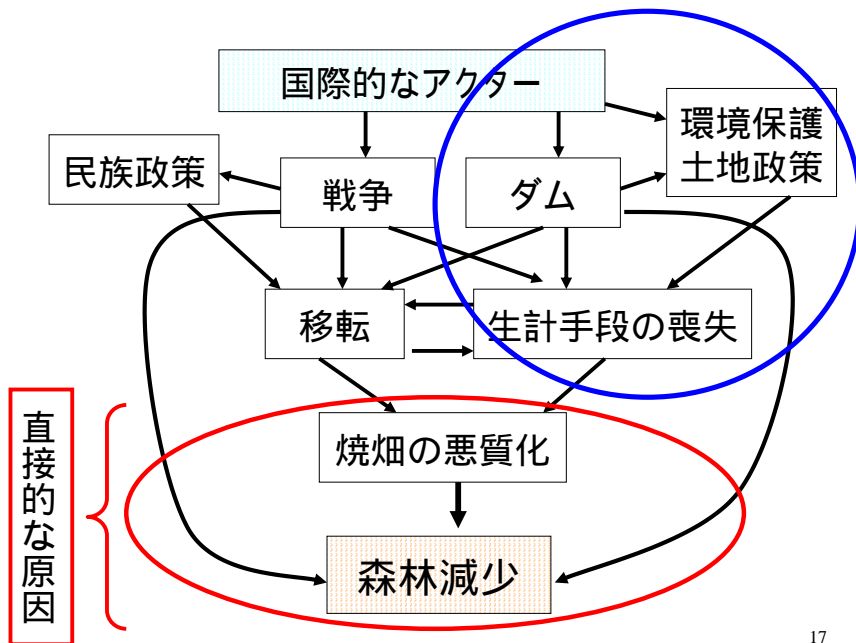


## 新たな侵入者

- 90年代初頭ナムグム川がダム湖に流れ込む周辺の村人がナムン村の南側に入植
- 反政府運動防止&魚の産卵地帯の保護を理由に立ち退かされたモン族ら
- 貯水池漁業奨励 モン族は泳げない
- 旧2村の水田の上手で焼畑 水涸れ
- 新2村は話し合いに応じず
- 土地森林政策で現状の固定化

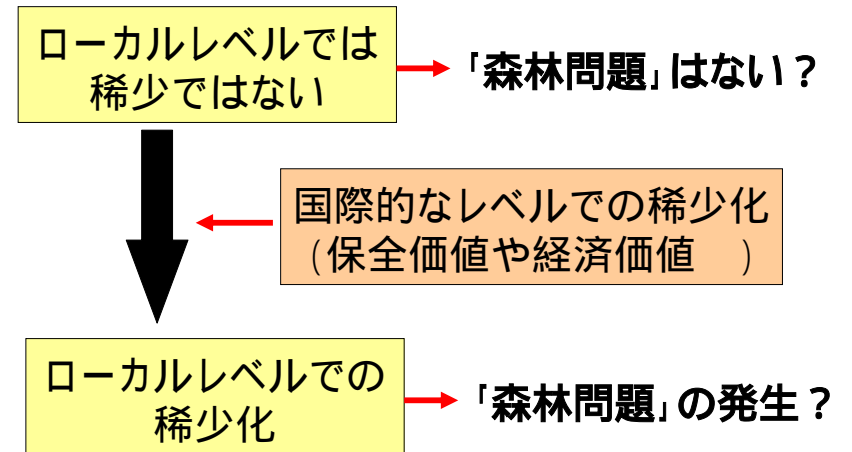
## 環境・民族・森林・土地政策





17

## (1) 森林の稀少化



18

## (2) 「あるもの」と「ないもの」

ナモン村は援助なしで、森林・水田・畜産をベースにした生計を維持しようと努力 「あるもの」を活かす

Q: 森林が破壊されるのはお金や技術がないからだろうか？ お金や技術があれば森林を守ることができるのだろうか？

森林減少 森林予算・事業の増加(組織拡大)、援助増加、森林の利権化、産業植林による便益は誰の手に？

19

## 森林減少を政策につなげる視点

- 森林を利用する人々の「生活の安全保障」(あるもの) v.s 代替生計手段(ないもの)
- 森林減少の直接的な(proximate)原因 v.s 背景にある(ultimate)原因
- 直接的な原因に依拠した森林政策(造林、保全等) v.s 背景要因に依拠した政策(インフラ、移転、生計手段)
- 金と技術が解決できる問題 v.s 金と技術がもたらす意図せざる影響

20